永遠の真理

ETERNAL TRUTH

2020年 12月

「闘争と勇気」「最後の働きの推進力（1）」「注がれたのは、尊い油」「和風グラタン」

永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

目次

今月の聖書勉強

「最後の働きの推進力（I）」 4

聖書の教え

朝のマナ

闘争と勇気 8

Conflict and Courage

現代の真理

「注がれたのは、尊い油」 40

わたしたちが信仰の一致に到達するまで

力を得るための食事

「和風グラタン」 46

レシピ

お話コーナー

「証人（I）」 48

イエスの物語

【正丸教会】

〒368-0071　埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1
電話：0494-22-0465

【沖縄集会所】

〒905-2261　沖縄県名護市天仁屋 600-21
電話：0980-55-8136

アクセス　www.4angels.jp

メール　sdarm.shomaru@gmail.com

発行日　2020 年 11 月 1 日
編集＆発行　SDA 改革運動日本ミッション
〒368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: Getty Image on Front page; Sermon View on page 48

Printed in Japan

神に選ばれ、据えられた隅の石の上に築く

神は、限りない知恵をもって、隅のおや石をえらび、それをご自分で据えられた。…主は、ご自分に信頼する者を決して失望させられない。…（各時代の希望下巻 43）

信じる者には、キリストは堅くすえられた隅のかしら石である。これらの人々は、岩なるキリストの上に落ちて砕ける人たちである。ここにキリストへの服従とキリストを信じる信仰があらわされている。岩なるキリストの上に落ちて砕けることは、自らを義とする思いを捨てて、子供のようなへりくだりをもってキリストのみもとに行き、罪とがを悔い改め、キリストのゆるしの愛を信じることである。われわれが隅のかしら石であられるキリストの上に築くのも、信仰と服従によってである。…そして、生ける石であられるキリストにつながることによって、この隅のかしら石の上に築く者はみな生ける石となるのである。（各時代の希望下巻 43-45）

ソロモンの神殿が建てられた時、壁と土台のための巨大な石は全部石切場で用意された。それらの石が建築場へはこんでこられると、手を加えないでそのまま用いられ、職人たちはその場所にすえつけさえすればよかった。（各時代の希望下巻 41,42）

多くの人々が自分自身の努力によって切られ、磨かれ、美しくされる。しかし彼らは、キリストとつながっていないので、生ける石となることはできない。このつながりがなければ、だれも救われない。われわれのうちにキリストのいのちがないならば、試みの嵐に耐えることができない。われわれの永遠の安全は、堅くすえられた隅のかしら石に築くことにかかっている。（各時代の希望下巻 45）

預言者に切り刻まれることを拒み、すべての真理に従って、魂を清めることをしない者…は、災害がくだるときになって、自分たちが建物に合わせて切り刻まれ、四角にされなければならないことを悟るのである。しかし、その時には、そうする時間もなく、天の父の前で彼らの執り成しをしてくださる仲保者もおられない。…であるから、われわれは、ますます主に近づき、主の日の戦いに立ち得るために必要な準備をするように、熱心に求めなければならない。神は聖であられて、神のみ前に住むことができる者は聖なる者だけであることを、すべての者が覚えているようにしよう。（初代文集 149,150）

愛する兄弟姉妹がた。われわれは、キリストが間もなく来られることと、われわれは、罪の世界に伝えるべき最後のあわれみの使命を持っていることを、心から信じているだろうか。…われわれが宣言している重大な真理を信じる者は、その信仰を実行しなければならない。（初代文集 210）

聖書の教え–現代の真理–

第20課　最後の働きの推進力（I）

三重の警告

600トンもの爆発物が、大変苦労しながらも、2,820トンもの宇宙船とその弾頭を発射させます。その発射体が勢いを増していくとき、着火された燃料は跡を残します。この怪物のような宇宙船が、38マイル（62km）の高さ、そして時速6,121マイル（時速9,850km）の速さに到達したときに、使い果たされた最初のロケットが切り離されます。そして重さ100トンのずっしりと燃料を積んだ2つ目のロケットが活動をはじめ、雷のような勢いでモジュールを前進させ、使い果たされる前に、時速15,690マイル（時速25,250 km）、高さ115マイル（185 km）まで到達します。3つ目のロケットが短く着火され、そのロケットは、118マイル（190 km）の高さ、17,523マイル（28,200 km）の速さで宇宙船を軌道に乗せます。その後、宇宙飛行のために3つ目のロケットが第二、もしくは第三の軌道で再び着火され、宇宙船を地球の重力から開放させ、その目的地と使命へと向かいます。

科学者たちは、どのようにすればそのような宇宙船の飛行が可能となるかについて、長い間研究と実験を重ねました。地球の重力からロケットを開放するために必要となる力を創出するという重大な問題は、「三段」ロケットの開発より初めて実現されました。

福音のメッセージも同じです。わたしたちの前回の課では、対立する二つの力について明らかにしていますが、第8課から11課においては、福音が甚大なずっしりと詰まった力が積み込まれていること、すなわち、これまでに生きてきた人々も、現在生きている人々も、将来生きる人々も一人ひとりを救うのに十分な力があることを表しています。わたしたちが終末に近づき、福音の最終的な力強い推進力が発動される一方、この世が我々を下に引きずり下ろそうとする力がかつてなかったほど強くなっています。しかし、天の主は、この福音のメッセージによって人々が勝利者となり、自分たちに向かって働くすべての反対勢力を打ち破る準備をさせるために計画を備えてこられました。このお方は3つの連続したメッセー

ジを与えてこられました。これらの各メッセージは、それぞれ続くメッセージが前のメッセージに結合することにより力を加え、非常に大きな効果を発揮し、終末の場面を通じて神の働きを前進させます。

これらのメッセージは、黙示録 14:6-11 にあります。既に非常に多くの預言が実現しましたが、これらのメッセージは今日のわたしたちのためのメッセージです。これらのメッセージは、終わりの時のためであり、わたしたちの目の前で実現しつつある過程にあります。

第一天使のメッセージ

使徒ヨハネは、一人の天使が飛んでいるのを見ました。「わたしは、もうひとりの御使が中空を飛ぶのを見た。彼は地に住む者、すなわち、あらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音をたずさえてきて、大声で言った、『神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである。天と地と海と水の源とを造られたかたを、伏し拝め』。」（黙示録 14:6,7）。

このメッセージは、「永遠の福音」の一部であると宣言されています。その天使は、運動を象徴しています。福音を述べ伝える働きは、人間に委ねられてきました。またその天使は、そのメッセージに伴う純潔さ、栄光、力を象徴しています。その天使が「中空を飛」んでおり、「大声で」、「地に住む者」、「あらゆる国民、部族、国語、民族」に対し警告を発しているという点は、その働きが迅速であり、かつ全世界を網羅する運動であることを示しています。このメッセージの時は、裁きの時が到来したことを告げることに示唆されています。それは、ただ終わりの時代に宣布することのできるものでした。なぜなら、その時にはじめて、さばきの時が来たということが真実になるからです。

預言者ダニエルは、終わりの時代について次のように述べています。「多くの者は、あちこちと探り調べ、そして知識が増すでしょう」。（ダニエル 12:4）。

このメッセージで言及されている裁きとは、全ての人が自分の報いを受けるときの黙示録 20:12,13 で述べられている裁きではありません。なぜなら、それはさらに将来のことだからです。このメッセージで述べられている裁きは、ダニエル書にあります。

「わたしが見ていると、もろもろのみ座が設けられて、日の老いたる者が座しておられた。その衣は雪のように白く、頭の毛は混じりもののない羊の毛のよう

であった。そのみ座は火の炎であり、その車輪は燃える火であった。彼の前から、ひと筋の火の流れが出てきた。彼に仕える者は千々、彼の前にはべる者は万々、審判を行う者はその席に着き、かずかずの書き物が開かれた。」（ダニエル 7:9,10）。

その裁きは、天において行なわれます。それは、キリストを受け入れ、自分の名前が命の書に記されたすべての人、すなわちかつて生きてきた人々と、今地上に生きている人々が、誤りのない天の書物に基づいて吟味される調査審判です。ここでの判決によって、人が救われるか失われるかが決まります。このメッセージのための時は、「終わりの時」であると預言されています。これは一部、第 7 課と第 11 課の二つの預言に関係しています。

裁きの時の始まりを告げる第一天使のメッセージは最初に、１９世紀初頭に提示されました。この運動は、ヨーロッパ諸国やアメリカの様々な国において、同じ時期に現われました。信仰と祈りの人々は預言を研究するように導かれ、世の終わりが間近に迫っていることの確かな証拠を見ました。アメリカにおいては、ウィリアム・ミラーとジョサイア・リッチが最初にこのメッセージを伝えた人々のうちにいました。ヨーロッパにおいては、ヘンリー・ドラモンド、およびユダヤ教から改宗したドクター・ジョセフ・ウォルフがまもない主の来臨を宣言し始めました。ドクター・ウォルフはヨーロッパに留まることはせず、「世界の宣教師」として知られるようになりました。彼は、アジアの最も野蛮な国々の多くへ旅をし、何度も強奪され、打ちのめされ、迫害されました。彼は、世界中の数多くの僻地にまで裁きのメッセージを伝えました。裁きの時のメッセージは、イギリス、南米、ドイツ、フランス、スイス、スカンジナビアにおいても伝えられました。この最後の国では、国教会は再臨宣教師たちを投獄させました。力強い天使の声を沈黙させることはできず、神はメッセージを奇跡的な方法で、すなわち小さな子供たちを通して、ある者は 6 歳から 8 歳にしかなりませんでしたが、彼らを通してメッセージを伝えることをよしとされました。彼らは未成年でしたので、国は彼らを抑制することはできませんでした。そこで彼らは何の妨げもなく、キリストの裁きと来臨のメッセージを伝えることを許されたのでした。

第二天使のメッセージ

「また、ほかの第二の御使が、続いてきて言った、「倒れた、大いなるバビロ

ンは倒れた。その不品行に対する激しい怒りのぶどう酒を、あらゆる国民に飲ませた者」。(黙示録 14:8)。

「バビロン」という言葉は、「バベル」に由来しており、混乱を意味しています。聖書で、その言葉は、様々なかたちの偽りの宗教を指しています。黙示録第 17 章においては女、すなわち聖書で、教会を象徴している比喩が用いられています。高潔な女は、純潔な教会を表しており、不道徳な女は、背教に陥った教会を象徴しています。

キリストとその教会の間に存在している神聖で永続的な関係は、結婚の結合により象徴されています。

「わたしは神の熱情をもって、あなたがたを熱愛している。あなたがたを、きよいおとめとして、ただひとり男子キリストにささげるために、婚約させたのである。」(コリント第二 11:2)。

信頼や愛情をキリストから転じることを許し、また世俗への愛が魂を占めることを許した不実は、結婚における誓いを犯すことに例えられています。

バビロンが倒れたことを告げる黙示録 14 章のメッセージは、かつては純粋だったが、後に堕落してしまった宗教団体にあてはまります。バビロンの罪の一つは、世の政府との違法な結合です。

黙示録第 14 章の第二天使のメッセージは最初、1844 年の夏に宣布されました。そして、当時最も直接的にあてはまったのは、米国の諸教会でした。そこでは裁きの警告が最も広く宣布されましたが、ほぼ全般的に拒み、諸教会の堕落が一番早かったのです。しかし、第二天使のメッセージは 1844 年に完全な成就に至ったわけではありませんでした。諸教会は道徳的堕落を経験しはしましたが、完全に倒れたわけではありませんでした。

神を最高に愛する人々が、もはやそのような教会とつながることができなくなるとき、その堕落は完全なものとなる。そのような教会は、「裏切り者、乱暴者、高言をする者、神よりも快楽を愛する者、信心深い様子をしながらその実を捨てる者」である人々とつながってはいられなくなる時が来ます (テモテ第二 3:4,5)。

黙示録 18:2-4 は、教会が完全に第二天使によって予告された状態に到達する時のことを指し示しています。そしてまだバビロンの中にいる神の民は、彼女から離れ去るように呼ばれるのです。

闘争と勇気

Conflict and Courage

12 月

十字架を掲げるパウロ

「なぜなら、わたしはイエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリスト以外のことは、あなたがたの間では何も知るまいと、決心したからである。わたしがあなたがたの所に行った時には、弱くかつ恐れ、ひどく不安であった。そして、わたしの言葉もわたしの宣教も、巧みな知恵の言葉によらないで、霊と力との証明によったのである。」（コリント第一 2:2-4）

説教に演説の様式を取り入れることが、パウロの習慣であった。彼は王たちや、アテネの偉大な学問ある人々の前で語るのに適任の人物であった。そして彼の知的な学識は福音の道を備えるにあたり、彼にとって重宝することがしばしばあった。彼はアテネでこうすることを務め、雄弁には雄弁で、哲学には哲学で、論理には論理で応じた。しかし、望んだような成果は見ることができなかった。彼はふりかえってみて、人間の知恵以上の何かが必要であることを理解するようになった。……彼は力をより高い源から受けねばならない。罪人に罪を悟らせ改心させるために、神の霊が彼の働きの中に入り、すべての霊的成長を清めねばならない。(SDA ﾊﾞｲﾌﾞﾙｺﾒﾝﾀﾘｰ［E・G・ﾎﾜｲﾄ・ｺﾒﾝﾄ］6巻1084)

しかし、パウロにとって、十字架は最高の関心をはらうべき唯一の対象であった。パウロは、十字架にかけられたナザレ人に従う者たちを迫害していたさ中にとらえられて以来、ずっと、十字架をあがめ続けてきた。そのとき、キリストの死に表された、神の無限の愛についての啓示が彼に与えられたのである。そして、彼の人生に驚くべき変化が起こり、彼のすべての計画と目的が天と一致するようになった。そのときからパウロは、キリストにある新しい人になった。罪人がみ子の犠牲の中に見られる天父の愛をあおぎ見て、神の感化力に従うとき、心に変化が起こり、それ以後、キリストがすべてであり、すべてのもののうちにおられると悟るようになることを、パウロは個人的な経験から知った。

パウロは改心したとき、ナザレのイエスを、人を変え救いを施す力のある生ける神のみ子として、同胞にぜひともあおぎ見させたいという願いをいだいた。それ以来彼は、生活のすべてをささげて、十字架にかけられた方の愛と力を描くことに全力をつくした。……

使徒パウロの努力は公開の説教だけに限られなかった。この方法では動かすことのできない多くの人々がいた。……彼は病気の者や悲しんでいる者を訪れ、苦しんでいる者を慰め、しいたげられている者を助けた。そして、自分の言うこと行うことのすべてに、イエスのみ名を高めた。……

パウロは彼の力が、自分自身の中にあるのではなく、聖霊のご臨在の中にあって、その尊い感化力が彼の心を満たし、一つ一つの思いをキリストに服従させてくださることを知った。……自己は隠されて、キリストがあらわされ、高められた。(患難から栄光へ上巻 264-272)

12月2日

福音を伝える天幕作りの職人

「わたしはすべての事につき、あなたがたに重荷を負わせまいと努めてきたし、今後も努めよう。」（コリント第二 11:9 下句）

パウロは天幕作りの職人であってこの仕事をして自分の生計を立てた。こうして働いている間に、彼は自分とかかわりをもった人々に福音を語り、多くの魂を誤謬から真理へと導いた。彼は救い主について語る機会をおろそかにしたり、困っている人々を助ける機会を逃がしたりしなかった。（手紙 107, 1904 年）

使徒パウロの経歴は、手仕事が人の品位を下げることはできず、手仕事と真の偉大さ、人間の気高さ、あるいはクリスチャンの品性は矛盾しないという絶え間ない証であった。パウロはこれらの苦労の跡が見える手が彼の感動的で分別があり、懸命で雄弁な訴えが持っている力を少しでも損なうとは思わなかった。……この苦労の跡が見える手を人々の前にさらしたとき、パウロは誰も彼の生計を支える必要はないという証をした。……彼はまた時々、仲間の働き人をも支え、他の人々の欠乏を軽減するために、自分自身は飢えに苦しんだ。自分の収入をルカと分け合い、テモテが旅行に必要な準備をするのを助けた。（同上 1900 年）

パウロは、当時教会の中で勢力を得つつあった意見、すなわち、福音は完全に肉体的労働の必要から解放された者によってのみ有効に宣布されるという意見に反する模範を示した。彼は、福音の真理を知らない人が多くいる場所で、献身した信徒が何をすることができるかということを、実際的方法で説明した。彼の行動は、卑しい労働者たちに励ましを与え、日毎の仕事によって生活を支えると同時に、神の働きを前進させるために彼らのなし得ることをしようという願望を起こさせた。……特別の才能をもった人々が、福音を教え、説教する働きにその全精力をささげるように選ばれる一方において、按手礼を受けていない他の多くの人々が、救霊の重要な務めを行うように召されているのである。……

彼の働きは、給料に影響されることなく、……彼は、天から任命を受けた。そして、ゆだねられた働きが終わった時に、彼は、その報賞を天から受けることを望むのである。（患難から栄光へ下巻 36, 37）

12月3日

有益な焼き捨て

「また信者になった者が大ぜいきて、自分の行為を打ちあけて告白した。 それから、魔術を行っていた多くの者が、魔術の本を持ち出してきては、みんなの前で焼き捨てた。その値段を総計したところ、銀五万にも上ることがわかった。 」(使徒行伝 19:18, 19)

エペソの改宗者たちは、魔術に関する本を焼くことによって、かつては自分たちが喜んでいたものが、今は嫌悪すべきものになったことを示した。彼らはこれまで、魔術を行うことによって特に神を怒らせ、おのれの魂を危険に陥れていた。そうした魔術に対して、彼らはそのような憤りを示したのであった。……

こうした本を手元に置いておけば、弟子たちは自分たちを誘惑にさらすことになったであろう。また、それらを売れば、ほかの人たちに誘惑となったであろう。弟子たちはやみの王国を拒絶し、その勢力を滅ぼすためには、どんな犠牲を払うこともためらわなかった。こうして真理は、人間の偏見と金銭欲とに勝利した。……

この事件は、パウロさえ悟らなかったほどの広汎な影響を及ぼした。エペソからこの事件が広く伝えられて、キリストのための働きは力強く促進された。使徒パウロが、人生の旅路を終えてからずっとのちまでも、これらの光景は人々の記憶に残り、人々を福音へと改心させる手段となった。

異教の迷信は二十世紀の文明以前に消えてしまったと、愚かにも考えられている。しかし、神のみことばと、事実の断固とした証拠は、昔の魔術師の時代と全く同じように現代においても、魔術が行われていることを言明している。古代の魔術の方法は、実際は、現代の心霊術として知られているものと同じである。サタンは死別した友人たちを装って現れ、幾千もの人々の心に近づく。……

今日の降神術の霊媒、透視者、占い師たちは、異教の時代の魔術師たちに当たる。……われわれの目からおおいが取り去られるならば、悪天使たちが人類を欺き滅ぼすために、あらゆる手段を用いているのが見えるであろう。人間に神を忘れさせるような力が働いているところではどこでも、サタンがその魔力を働かせているのである。……エペソの教会に与えられたパウロの訓戒を、心にとめねばならない。「実を結ばないやみのわざに加わらないで、むしろ、それを指摘してやりなさい」(エペソ 5：11)。(患難から栄光へ上巻 311-313)

12月4日

若い時に

「あなたは、年が若いために人に軽んじられてはならない。むしろ、言葉にも、行状にも、愛にも、信仰にも、純潔にも、信者の模範になりなさい。」（テモテ第一 4:12）

教師として神から選ばれた者、彼はただの若者に過ぎなかった。しかし適切な教育によって、彼の原則が非常に堅固にされたので、この重要な地位にふさわしい者となったのである。彼はクリスチャンらしい柔和さをもって責任を負った。彼は忠実、堅固、真実であった。そこでパウロは、ともに働き旅する仲間として選んだ。テモテが、年が若いために軽んじられないように、パウロは「あなたは年が若いために人に軽んじられてはならない」と書いた。テモテは自己に満足せず、絶えず導きを求めていたので、パウロは自由にテモテに手紙を書くことができた。

判断よりも衝動に動かされて行動する多くの青年がいる。しかしテモテは、行動する場合はいつでも、「これは主の道であろうか」と尋ねた。彼は特別に優れた才能をもっていなかったが、持っていたすべての才能を神の奉仕のためにささげた。これが彼の働きを尊いものにしたのである。主は彼のうちに聖霊の住まいを形作り、形成することのできる思いがあるのをご覧になった。

神は、もし青年たちが神の導きに従うならば、テモテを用いられたように、今日も青年たちを用いられるであろう。神の宣教者であることは、特権である。神はあなたに、友のために働くように求めておられる。あなたが知っている、危険の中にいる人々を探し出し、キリストの愛をもって彼らを助けるように努めなさい。キリストの美徳をキリストの従者たちのうちに見なければ、どうして彼らは救い主を知ることができるであろうか。（SDA ﾊﾞｲﾌﾞﾙｺﾒﾝﾀﾘｰ［E・G・ﾎﾜｲﾄ・ｺﾒﾝﾄ］7巻915）

教会の青年たちにとっての最高の目的は何か新奇なものを求めて懸命になることであってはならない。テモテの思いや、働きの中にはこのようなものは何もなかった。青年たちは、あらゆる善の敵の手の内にあっては、知識だけでは、自分たちを滅ぼす力になり得ることを心にとめておくべきである。天使の中で高い地位を占め、ついには反逆者となったものは、非常に理知的な者であった。そして優れた知性を得ている人のうち多くの者が現在サタンのとりこにされつつある。青年たちは聖書の教えのもとに自分の身を置いて、日々の思想と実生活の中にその教えを織り込むべきである。そうすれば、天の宮廷において最高級とみなされる特質をもつようになるであろう。（ﾕｰｽ・ｲﾝｽﾄﾗｸﾀｰ 1898年5月5日）

12月5日

子供の時から

「また幼い時から、聖書に親しみ、それが、キリスト・イエスに対する信仰によって救に至る知恵を、あなたに与えうる書物であることを知っている。」（テモテ第二 3:15）

テモテには敬神と真の信心に関する正しい模範が与えられていたという利点を見る。宗教が彼の家庭の雰囲気であった。家庭で表された敬虔の霊的力は彼に清い言葉を保たせ、堕落させるあらゆる意見から彼を守った。（SDA ﾊﾞｲﾌﾞﾙｺﾒﾝﾀﾘｰ［E・G・ﾎﾜｲﾄ・ｺﾒﾝﾄ］7巻 919）

子供たちに神の要求を教え、先祖たちに対する神の処置のすべてを彼らに良く教えるように、神はヘブル人に命じておられた。これは、すべての親の特別の義務で、他人に委託できないものであった。他人のくちびるではなくて、父親と母親の愛の心からの教えが、子供たちに与えられなければならなかった。日ごとの生活のすべての出来事に、神の思想が関連づけられなければならなかった。神の民の救済にあらわされた神の大きなみわざ、そして、来たるべき贖い主の約束は、イスラエルの家庭で、くり返し語られるべきであった。……神の摂理と来世に関する大真理が若い心に強い印象を与えた。若い心は自然の光景にも、啓示の言葉にも、同じように神を認める訓練を受けた。天の星々、平原の樹木、草花、高山、小川のせせらぎなどのすべては、創造主について語っていた。聖所の厳粛な犠牲の儀式、聖所の礼拝、預言者の言葉は神の啓示であった。

モーセは、ゴセンのそまつな住宅でこのような教育を受けたのである。サムエルは、忠実なハンナから教えられた。ダビデは、ベツレヘムの丘の住居で、こうした訓練を受け、ダニエルは、捕虜として連れ去られるまで、父の家で、こうした訓練を受けた。ナザレにおけるキリストの幼少時の生活も、このようなものであった。また少年テモテが祖母ロイスと母ユニケの口から聖書の真理を学んだのも、こうした訓練によってであった。（人類のあけぼの下巻 253 － 255）

両親方よ、あなたはイエスのためになすべき大いなる働きがある。……サタンは鉄の帯で子供たちを自分自身に結びつけようとしている。だからあなたは断固とした個人的努力を通してのみ、子供たちをイエスのもとに連れていくのに成功することできる。（ｾﾚｸﾃｯﾄﾞ・ﾒｯｾｰｼﾞ 1巻 319）

12月6日

子としてできるすべて

「あなたは真理の言葉を正しく教え、恥じるところのない錬達した働き人になって、神に自分をささげるように努めはげみなさい。」（テモテ第二 2:15）

パウロは「信仰による……真実な子」テモテを愛した（テモテ第一 1:2）。この偉大な使徒はしばしば、聖書の歴史についてこの若い弟子に質問しては話を引き出した。また２人で旅行してまわるときには、働きを成功させる方法を注意深く教えた。（患難から栄光へ上巻 220）

パウロとテモテの友情はテモテの改心と共に始まり、そのきずなは、伝道生活の希望、危険、労苦を共にするにしたがって、一つの体であると思われるまで強くなっていった。年齢や性格の相違は彼らの相互の愛を一層強くした。パウロの熱烈、熱心、不屈の精神は、テモテの温和、従順、謙遜な性質に安らぎと慰めとを見出した。この頼もしい仲間の忠実な奉仕と優しい愛は、使徒の生涯に訪れた多くの暗黒の時を明るくした。若いテモテと試練や孤独のうちにあったパウロとの関係は全く、ルターに対するメランヒトンや、愛し尊敬できる父親に対する息子のようであった。（SDA ﾊﾞｲﾌﾞﾙｺﾒﾝﾀﾘｰ［E・G・ﾎﾜｲﾄ・ｺﾒﾝﾄ］７巻 917）

テモテが神を愛したので、パウロはテモテを愛した。体験的敬虔と真理について理解力のある彼の知識は彼に卓越性と感化力とをもたらした。彼の家庭生活の敬虔さと感化力は安っぽいものではなく、純潔で思慮深く、偽りの意見で腐敗させられなかった。……神のみ言葉がテモテを導いた規準であった。……彼は、最高の種類の感銘を受けていた。彼の家族である教師たちは、彼が若年期に訪れる重荷を負うことのできるように、この青年を教育するために神と共に働いた。（同上 918）

テモテはその働きにおいて、絶えずパウロに忠告や指示を求めた。彼は衝動的に行動することなく、一歩ごとにこれは主の方法だろうかとたずねながら、慎重に落ち着いて考えた。聖霊はテモテを、神が内住される宮として形づくることのできる者と見られた。

聖書の教訓が日常生活の中に徐々に入って行くとき、それは品性に深く、永続的な感化を及ぼす。このような教訓をテモテは学び、実行した。（患難から栄光へ上巻 221）

12月7日

たいまつを掲げて

「神のみまえと、生きている者と死んだ者とをさばくべきキリスト・イエスのみまえで、キリストの出現とその御国とを思い、おごそかに命じる。御言を宣べ伝えなさい。時が良くても悪くても、それを励み、あくまでも寛容な心でよく教えて、責め、戒め、勧めなさい。」（テモテ第二 4:1，2）

このテモテへのパウロの最後の手紙の中で、パウロはこの若い働き人の前に高い理想をかかげ、キリストに仕える者として彼にゆだねられている義務を指し示した。……

パウロはテモテを神の法廷に呼び出し、人の言い習わしや習慣ではなくみことばを宣べ伝えるように、大会衆の前でも、個人的な集まりでも、道ばたでも炉辺でも、友人にも敵にも、安全な時も、困難や危険、非難や損害にさらされている時も、機会があるときにはいつでも神のためにあかしをたてるように、と命じる。

テモテの性質が穏やかで従順なために、彼の働きの大事な部分を避けるのではないかと案じて、パウロは彼に、罪は忠実に譴責するように、また、ひどい悪事を行っている者は厳しく譴責するようにと、熱心に説いた。しかもテモテはこれを、「あくまでも寛容な心でよく教え」なければならなかった。……

罪を憎んで譴責しながら、同時に罪人をあわれみ、やさしさを示すということは、むずかしいことである。われわれが、心と生活を聖潔の域に到達させようと熱心に努力すればするほど、罪に対するわれわれの知覚は鋭敏になり、正しいものからの逸脱を認めぬ気持ちがいよいよ強まってくる。われわれは、不正な行いをする者に過度に厳しくならぬよう注意しなければならないが、しかしまた、罪のはなはだしい罪深さというものを見落とすことのないよう、気をつけなければならない。過ちを犯している者に、キリストのような忍耐と愛を示すことは必要であるが、過ちに寛大すぎると、譴責を受けるほどでもないと彼に思い込ませてしまい、その譴責を不必要なもの、不当なものとして拒むようにさせてしまう危険がある。……

神の律法に対する軽蔑がひどくなるにつれて、宗教に対する嫌悪が増し、人はますます高慢になり、快楽を愛し、両親にそむき、放縦になる。そして、思慮深い人々はいたるところで、こうした驚くべき悪をどうしたら正すことができるだろうかと、心配してたずねている。答えは、テモテに与えたパウロの勧告の中に見いだされる。「御言を宣べ伝えなさい」。聖書には、唯一の安全な行動原理が示されている。聖書は神のみこころの写しであり、神の知恵の表現である。（患難から栄光へ下巻 197 － 201）

12月8日

つぐなった脱落者

「マルコを連れて、一緒にきなさい。彼はわたしの務めに役に立つから。」（テモテ第二 4:11）

マルコの母はキリスト教に改宗していて、エルサレムにある彼女の家は、弟子たちのための隠れ場であった。……マルコが伝道旅行に加わりたいとパウロとバルナバに申し出たのも、使徒たちが母の家をたずねたときのことであった。彼は心に神の恩寵を感じて、福音伝道の働きに自分のすべてをささげたいと望んだ。……

……それは骨の折れる道であった。彼らは困難や不自由な目にあい、四方から危険に襲われた。彼らが通った町や都市や、物寂しい街道で、目に見える危険にも見えない危険にもとり囲まれた。しかし、パウロとバルナバは、神の救いの力に頼ることをすでに学んでおり、二人の心は滅びゆく魂への熱烈な愛に満たされていた。いなくなった羊を捜している忠実な羊飼いのように、彼らは自分たち自身の安楽や都合などは少しも念頭に置かなかった。自己を忘れ、疲れや飢えや寒さにもひるまなかった。彼らは、おりから遠くへさまよい出た人々の救いという、たった一つの目的しか心に留めていなかった。

マルコはここで、不安と落胆にくじけてしまって、主の働きに全心全霊を打ちこんで献身するという彼の目的が、一時ぐらついた。彼は困難に慣れていなかったので、道中の危険と窮乏に気力を失ってしまったのである。彼はこれまで順調な境遇のもとに働いて成功してきたが、いま開拓伝道者たちにしばしばつきまとう反対と危険のさなかにあっては、十字架のよき兵士として困難に耐えることができなかった。 彼は、勇敢な心で危険と迫害と逆境に立ち向かうことを、これから学ぶはずであった。しかし、使徒たちが前進するにつれて、さらに大きな困難が危惧されたとき、マルコは恐れてすっかり勇気を失い、先へ進むことを拒み、エルサレムへ引き返したのである。

パウロは働きを放棄したマルコを非難し、一時は厳しいほどの批判を下していた。一方、バルナバは、経験のないマルコには無理もないことと思っていた。そして彼は、キリストのために役立つ働き人になるにふさわしい資質をマルコが備えていることを見て、マルコにこのまま伝道を放棄させてはならないと考えていた。このマルコへの配慮は、何年かのちに豊かに報われた。この若者は主のために、また困難な伝道地で福音使命を宣べ伝える働きに、惜しみなく献身したからである。神の祝福とバルナバの賢明な指導のもとに、マルコは貴重な働き人に成長した。

パウロは後にマルコと和解して、共労者として彼を迎えた。（患難から栄光へ上巻 178-182）

12月9日

マルコとデマス

「世と世にあるものとを、愛してはいけない。もし世を愛する者があれば、父の愛は彼のうちにない。」（ヨハネ第一 2:15）

ローマにいたパウロの助力者たちの中には、以前の仲間や共労者たちが大勢いた。「愛する医者」ルカは、…まだ彼と共におり、…デマスとマルコも彼と共にいた。……

マルコのクリスチャン経験は、信仰を告白した当初のころから次第に深まってきていた。彼はキリストの一生と死について綿密に研究するにつれて、救い主の使命、その辛労と戦いをはっきり把握できるようになった。キリストの手足の傷あとの中に、人類のためにささげて下さった奉仕のしるしと、失われて滅びゆく者を救うために示された自己放棄の深さを認めて、マルコは喜んで主にならって自己犠牲の道を歩むようになっていた。今彼は捕らわれの身となったパウロと運命を共にすることによって、キリストを得ることは無限に益となることであり、世を得て、あがないのためにキリストが血を流された魂を失うことは無限に損となることを、一層よく悟ることができた。彼は激しい試練や逆境に会ってもぐらつかず、最後までパウロの愛する賢い助け手となった。

デマスはしばらくの間しっかりしていたが、後になってキリストのみわざを見捨てた。これについてパウロは、「デマスはこの世を愛し、わたしを捨て」たと書いた(テモテ第二 4：10)。この世の利益のためにデマスは高尚で立派な報酬をすべて手放した。なんと先見の明のない交換であろう。この世の富や名誉だけを持って、たとえどんなにそれが豊かだと誇ってみたところで、デマスはほんとうに貧しかった。一方、マルコはキリストのために苦しむことを選び、天において神の相続人、キリストと共同の相続人とみなされて永遠の富を持っていた。（患難から栄光へ下巻 146 － 148）

自分の思いをキリストと天国についてもっとよく思い巡らせたいのであれば、わたしたちは主の戦いを戦うにあたって力強い激励と支持を得なければならない。わたしたちがまもなく自分たちの家郷となるよりよい地の栄光を熟視するとき、自尊心や世に対する愛はその力を失う。キリストの麗しさに比べるとあらゆる世の魅力は少しも価値のないものに思える。（清められた生涯 91）

12月10日

主人と僕

「しかも、もはや奴隷としてではなく、奴隷以上のもの、愛する兄弟としてである。とりわけ、わたしにとってそうであるが、ましてあなたにとっては、肉においても、主にあっても、それ以上であろう。」（ピレモン 16）

パウロがローマで働いた結果、神に心をささげた者の中にオネシモがいた。オネシモは異教徒で奴隷の身であったが、その主人にあたるコロサイの信者ピレモンに不都合なことをしたためにローマに逃げて来ていた。パウロはあわれな逃亡者が困って苦しんでいるのを親切に助けてやり、それから彼の暗い心に真理の光を照らそうと努めた。オネシモはいのちの言葉に耳を傾け、罪を告白して、キリストを信じる信仰へと改心した。……

パウロは…すぐピレモンのところへ帰ってゆるしを請い、そして将来の計画をたてるようにすすめた。使徒はピレモンが失った金額についての責任を負うと約束した。…悪い事をした自分から主人の前に出て行くことは、このしもべにとってつらい試みではあったが、彼は本当に改心していたので、この義務を回避しなかった。……

ピレモンへのパウロの手紙は、福音が主人としもべとの関係に及ぼす影響について教えている。奴隷所有は、ローマ帝国内に行きわたった既定の制度で、パウロが働いていた教会のほとんどどこででも主人と奴隷の姿が見られた。……

既成の社会制度を独断的に、あるいは急にくつがえすことは使徒パウロの仕事ではなかった。これを試みようとすれば、福音の成功が阻まれるであろう。しかし彼は、奴隷制度の根本にある原則、しかも、それが実行されれば奴隷制度全体を揺るがせること必然であろうと思われる原則を教えた。…奴隷オネシモは改心してキリストのからだの一員となったのであるから、主人と共に神の祝福と福音の特権にあずかる兄弟として、また相続人として愛され、取り扱われなければならなかった。一方、しもべたちは「人にへつらおうとして目先だけの勤めをするのでなく、キリストの僕として心から神の御旨を行い」、自分たちの義務を果たさなければならなかった（エペソ 6:6）。

キリスト教は、主人と奴隷、王と臣民、福音を説く牧師とキリストの中に罪からのきよめを見いだしている堕落した罪人との間に、強い一致のきずなをつくる。彼らは同じ血潮に洗われ、同じみ霊によって生かされた。そして彼らはキリスト・イエスにあって一つとされているのである。（患難から栄光へ下巻 148-152）

12月11日

目の前にある競争

「こういうわけで、わたしたちは、このような多くの証人に雲のように囲まれているのであるから、いっさいの重荷と、からみつく罪とをかなぐり捨てて、わたしたちの参加すべき競走を、耐え忍んで走りぬこうではないか。信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ、走ろうではないか。彼は、自分の前におかれている喜びのゆえに、恥をもいとわないで十字架を忍び、神の御座の右に座するに至ったのである。」（ヘブル 12:1，2）

ヘブル人への手紙の中に、永遠の命を得ようとしているクリスチャンの競走の特徴は、一意専心その目的に向かって進むことだと指摘されている。…ねたみ、悪意、邪推、悪口、貪欲などは、クリスチャンが永遠の命をめざす競走に勝利するために、捨て去らなければならない重荷である。われわれを罪におとしいれ、キリストのみ栄えを汚すような習慣や行為は、みな、どんな犠牲を払ってでも捨て去らなければならない。……

…「あなたがたは知らないのか。競技場で走る者は、みな走りはするが、賞を得る者はひとりだけである」とパウロは言った。競走者たちが、どんなに熱心に真剣に努力しても、賞は、ただ一人にしか与えられなかった。……

ところが、クリスチャンの戦いは、そのようなものではない。条件に従った者は、競走の終わりにおいて、だれ一人として失望におちいることはない。真剣に耐え忍ぶ者は、一人として失敗することはない。それは、いちばん速い者のための競走ではなく、いちばん強い者のための競争でもない。最も強い聖徒とともに最も弱い聖徒も、永遠の栄光の冠を受けるのである。……

パウロは、クリスチャンの競走において、目標のはっきりしないような、いいかげんな走り方をしないために、厳しい訓練に自らを従わせた。「自分のからだを打ちたたいて」という言葉は、定義的には、厳しい訓練によって、欲望、衝動、情欲などを抑制するという意味である。……

パウロが、コリントの信者たちの生活に現れるのを見たいと熱望したのは、永遠の生命を勝ち取ろうとするこうした心からの決意であった。彼は、彼らが、キリストが彼らのために持っておられる理想に到達するためには、避けることのできない一生涯にわたる苦闘が、彼らの前にあることを知っていた。パウロは、彼らに、原則に従って努力し、日ごとに、敬虔と道徳的卓越を追求するように勧めた。すべての重荷を捨てて、キリストにある完全という目標に向かって前進するよう、彼らに訴えた。（患難から栄光へ上巻 336 － 338）

その結果の重要性を考えるとき、それを助けたり、妨害したりするものは、何一つささいなこととは言えない。すべての行動は、人生の勝利か、または、敗北を決定する重みを持っている。そして勝利者に与えられる報賞は、彼らが努力する気力と真剣さに比例している。（同上 337，338）

12月12日

喜びの声

「あなたがたは、主にあっていつも喜びなさい。繰り返して言うが、喜びなさい。」（ピリピ 4:4）

偉大な使徒パウロは義務と原則にかかわる場合はいつでも堅固であった。しかしまた彼の品性は礼儀正しさが著しい特徴であり、このことは彼が上流階級の人々に近づく機会を与えた。パウロは自分がクリスチャンとしての生涯を送るために必要な恵みを与えることに対する神の能力やみ旨を疑ったことはなかった。……彼は半信半疑という霧や闇の中で自分の道を暗中模索したり、苦難や試練をつぶやくことにより、疑いという雲の下で生きることをしない。希望と勇気に満ちた喜びの声がわたしたちの時代にまで響いている。パウロには健全な宗教体験があった。キリストの愛と自分を治める自制力が彼の偉大な主題であった。

中途半端なクリスチャンならば意気消沈させてしまうような、これ以上ないほどの失望する状況の時でも、パウロは心を堅固にし、勇気と希望と快活に満ち溢れていた。……彼が船の甲板にいて嵐が襲い、船が壊れそうになっていても、同じ希望と快活さが見られる。パウロは船の指揮官に命じ、乗船していたすべての者の生命を守る。囚人であっても実際にはパウロが船の主人であり、船上で一番自由なまた幸福な者である。……

自分の命をその手に握っている王や高官の前であっても、パウロはひるまない。なぜなら、自分の生命は神にささげ、キリストのうちに隠されているからである。権力を持っていながら、荒々しい気性であり、その心や生涯が悪意に満ち、堕落していても、この人々の心をパウロは礼儀正しくすることによりやわらげた。……礼儀にかなった態度、真の礼儀正しい物腰が彼の行状すべてに記されている。パウロが話すときの習慣として手を差し伸べたとき、鎖のなる音が彼を恥ずかしく思わせたり、当惑させることはなかった。彼はその鎖を名誉のしるしとみなし、神のみ言葉とイエス・キリストの証のために苦しむことができることを喜んだ。……彼の論証は非常にはっきりとしており、得心させるものだったので、放将な王を震え上がらせた。……恵はあわれみの天使のように十字架の物語とイエスの計り知れない愛を繰り返すパウロの声を快くはっきりと聞こえるようにする。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ｻﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1879 年 11 月 6 日）

目標を目ざして

「兄弟たちよ。わたしはすでに捕えたとは思っていない。ただこの一事を努めている。すなわち、後のものを忘れ、前のものに向かってからだを伸ばしつつ、目標を目ざして走り、キリスト・イエスにおいて上に召して下さる神の賞与を得ようと努めているのである。」（ピリピ 3:13，14）

パウロは多くのことをなし、賢い教師であった。彼のたくさんの手紙は正しい原則を示している有益な教訓に満ちている。彼は天幕作りの職人だったので、手ずから働き、この方法により日々の糧を得た。…彼は諸教会のために重荷を負っており、教会の過ちを彼らの前に示すためにこの上なく熱心に努力した。それは彼らが過ちを正し、欺かれて神から離れるよう導かれないためであった。彼は常に困難な時に彼らを助けようと努めていた。しかも彼は「わたしはただこの一事を努めている」と宣言する。……彼の人生の責任は多かったが、常に自分の前に「この一事を」置いていた。神のご臨在を絶えず感じることにより、彼の目は信仰の創始者であり、完成者であるイエスを見続けた。（手紙 35，1897 年）

辛苦と困難に直面しながらパウロを前進させたその偉大な目標こそ、すべてのクリスチャンの働き人を導き、神の奉仕に自分のすべてをささげさせるものである。働き人の注意を救い主からそらすために、世的な誘惑がふりかかるであろう。しかしクリスチャンの働き人は、ひたすら目標に向かって進み、神のみ顔を見る望みは、その望みを達成するために必要な努力と犠牲のすべてに値するものであることを、この世に、天使たちに、また人々に示さなければならない。（患難から栄光へ下巻 178）

最も卑しいキリストの弟子も天の住人となり、朽ちずしぼむことのない資産を受け継ぐ者となることができる。ああ、一人一人が天来の賜物を選び、どのような破壊者からもそのタイトルが守られている嗣業、終わりのない世界に対する神の相続人となることができるとは！ああ、世を選ばないで、より良い嗣業を選びなさい。キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の賞与を得ようと努めなさい。（ｸﾘｽﾁｬﾝ教育の基礎 235）

まもなくわたしたちはわたしたちの王の戴冠式を目撃するであろう。その命がキリストと共に隠されている者、この地上で信仰の戦いを立派に戦った者は、神の王国において贖い主の栄光で輝き出るであろう。（教会への証 9 巻 287）

12月14日

カイザルに

「わたしは今、カイザルの法廷に立っています。わたしはこの法廷で裁判されるべきです。よくご承知のとおり、わたしはユダヤ人たちに、何も悪いことをしてはいません。もしわたしが悪いことをし、死に当るようなことをしているのなら、死を免れようとはしません。しかし、もし彼らの訴えることに、なんの根拠もないとすれば、だれもわたしを彼らに引き渡す権利はありません。わたしはカイザルに上訴します。」（使徒行伝 25:10，11）

こうして、神のしもべは、もう一度、偏見と自己を義とする精神から生じた憎しみのために、異邦人の保護を求めなければならなくなった。預言者エリヤはこの同じ憎しみを避けて、ザレパテ（サレプタ）のやもめの助けを求めなければならなかった。そしてまた、この憎しみのゆえに、福音の使者たちはユダヤ人を離れて、異邦人に彼らの使命を伝えなければならなくなった。そして、現代の神の民は、今なお、同じ憎しみに当面しなければならない。キリストの弟子であると自称する多くの人々の中には、ユダヤ人の心の大半を占めていたのと同じ誇りや形式主義や利己主義、同じ圧迫の精神が存在しているのである。…やがて、神に忠実なしもべたちが 通過しなければならない大いなる危機において、彼らは、同様の心のかたくなさ、同様の残酷な決意、同様の頑強な憎しみに出会わなければならない。

来るべき悪しき日において、良心の命じるところに従って、恐れることなく神に仕えようとする者はすべて、勇気と堅実さと、神および神のことばに対する知識を持っていなければならない。神に忠実な者は、迫害を受け、その動機は疑われ、その最善の努力は曲解され、その名は悪しき者として除外される。サタンは、あらゆる欺瞞の力を用いて人々の心に働きかけ、理解力をにぶらせ、悪を善と見せかけ、善を悪と見せかけようとする。（患難から栄光へ下巻 118，119）

神は、神の民がまもなくやってくる危機に対して準備することを望んでおられる。……神の標準にその生活を一致させた者だけが、試練と試みの時に堅く立つことができるのである。世俗の統治者たちが、宗教界の指導者たちと連合して、良心の問題について使命を発する時に、真に神を恐れ神に仕える者が誰であるかが、はっきりするのである。暗黒がその極みに達する時に、神に似た品性の光が、最も輝かしく照り映えるのである。……真理の敵があたり一面にいて、主の僕たちに災いをもたらそうとしているときに、神は彼らを保護して、幸いをもたらされる。神は、彼らにとって、疲れた地にある大きな岩の影のようになられるのである。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ｻﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1906 年 12 月 5 日）

神の守り

「わたしの第一回の弁明の際には、わたしに味方をする者はひとりもなく、みなわたしを捨てて行った。どうか、彼らが、そのために責められることがないように。しかし、わたしが御言を余すところなく宣べ伝えて、すべての異邦人に聞かせるように、主はわたしを助け、力づけて下さった。そして、わたしは、ししの口から救い出されたのである。」（テモテ第二 4:16，17）

パウロが、裁判を受けるためにネロ皇帝の前に出頭するよう命じられた時、それは確実に死が近づいたことを予期させた。…

ローマのクリスチャンの中には、この試練の時に彼の弁護を申し出る者は一人もなかった。 …

ネロの前に立つパウロ。これはなんと著しい対照であろう。…ネロの名は世界を震え上がらせた。彼の不快を招くことは、財産、自由、生命を失うことであり、彼の不きげんは疫病よりもっと恐ろしいものであった。

金はなく、友もなく、弁護者もなく、年老いた囚人パウロはネロの前に立った。皇帝の顔つきには、内面の荒れ狂う激情の恥ずべき記録が現れていたが、被告の顔には、神と共にある平和な心が現れていた。（患難から栄光へ下巻 187－190）

気まぐれで激しやすく放蕩な暴君であるネロが、この神の子の品性や動機を理解したり、正しく評価することをどうして期待できたであろうか。…正反対の教育体系の結果がこの日対照的に、すなわち無制限な自己放縦の生涯と完全な自己犠牲の生涯が相対したのであった。ここに二つの人生哲学の代表者、すなわち、つかの間の満足感のためには何を犠牲にしてもよいと思うすべてを飲み込む利己心と、必要ならば他の人々の益のために生命そのものすら差し出す準備のできた自己否定的な忍耐の持ち主がいた。

人々と裁判官たちは驚いてパウロを見た。彼らは多くの裁判に出席したことがあり、多くの犯罪者を見たことがあったが、このように聖なる平穏な様子をした人を見たことがなかった。……彼の言葉は、最もかたくなな人の心の中にある弦ですら、かきならしたのであった。はっきりとした納得させる真理は過ちを覆した。……この場で語られた言葉は国々を震わせることになっていた。……

不信心な者の中にいる信心深い者、不忠実な者の中にいる忠実なものであるパウロは神の代表者として立っており、彼の声は天からの声のようであった。……彼の言葉は戦いのどよめきよりひときわ高い勝利の叫びのようであった。（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ｻﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1906 年 12 月 5 日）

12月16日

よい戦い

「わたしは戦いをりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした。今や、義の冠がわたしを待っているばかりである。かの日には、公平な審判者である主が、それを授けて下さるであろう。わたしばかりではなく、主の出現を心から待ち望んでいたすべての人にも授けて下さるであろう。」（テモテ第二 4:7, 8）

パウロは長い奉仕の期間をとおして、救い主への忠誠がぐらついたことは決してなかった。どこにいようとも―むずかしい顔をしたパリサイ人や、あるいはローマの役人たちの前であろうと、ルステラでの怒り狂う群衆や、マケドニヤの獄屋での囚人たちの前であろうと、難破船の上であわてふためいている水夫たちを説得している時であろうと、ネロの前にただひとり立って弁明している時であろうと―パウロは自分の擁護する主義を決して恥としなかった。パウロのクリスチャン生活の一大目的は、かつてはその名を軽蔑していた方に仕えることであった。どんな反対や迫害も、彼をこの目的から引き離すことはできなかった。（患難から栄光へ下巻 196）

パウロの生涯は、彼の説いた真理を例証するものであった。そしてここに彼の力があった。彼の心は、深い不動の責任感で満ちていた。そして彼は、正義と憐れみと真理の源泉であられる神と密接に交わりながら働いた。…救い主への愛は、キリストへの奉仕においてパウロが、この世の敵意や、敵たちの反対をも押しのけて進んだ時に、自己との戦いや悪との苦闘の中で、彼を絶えず支えた動因であった。

この危難の時代に教会に必要なものは、パウロのように、自分自身を有用なものに教育し、神の事柄に深い体験を持ち、まじめで熱意に満たされている働き人の軍隊である。きよめられた、献身的な人々が必要とされている。それは、試練や責任を避けない人々であり、勇敢で真実な人々であり、「栄光の望み」であられるキリストが心の中に形づくられている人々であり、きよい火に触れたくちびるで「御言を宣べ伝え」る人々である。……

青年たちは父たちの手から、その聖なる責任を受け取るであろうか。彼らは、信仰者の死によって欠員となる場所を、補充する用意をしているだろうか。若い者たちをそそのかす、利己主義や野心への誘惑のただ中にあって、パウロの教訓はかえりみられ、義務への召しは聞かれるであろうか。（同上 203，204）

12月17日

互いに愛し合いなさい

「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある。愛する者たちよ。神がこのようにわたしたちを愛して下さったのであるから、わたしたちも互に愛し合うべきである。」（ヨハネ第一 4:10，11）

キリストの昇天後、ヨハネは主のための忠実で熱心な働き人として目立った存在となった。…

彼は心の中で育ったキリストへの愛に導かれて、同胞のために、また特にキリスト教会の兄弟たちのために、熱心な、たゆまない働きを進めた。

キリストは最初の弟子たちに、キリストが彼らを愛されたように、互いに愛し合いなさいと命じておられた。……

聖霊の降下ののち、弟子たちが生ける救い主を宣べ伝えに出て行った時、彼らの一つの願いは人々の魂の救いであった。彼らは聖徒たちの交わりのすばらしさに恵まれた。弟子たちはやさしく、思いやりがあり、自制し、真理のためには喜んで犠牲を払った。毎日、互いに交わるうちに、キリストが彼らに申しつけられた愛をあらわすようになった。……

しかし、少しずつ変化が起こった。信者たちは他人の欠点を探し始めた。…救い主とその愛を見失った。……

ヨハネは教会内に兄弟愛が欠けてきていることを悟り、この愛が絶えず必要なことを信者たちに説き勧めた。…

キリストの教会を最も危うくするものは、この世の反対ではない。教会を最も深刻な不幸に陥れるものは、信者たちの心に隠された悪であり、それは最も確実に神のみわざの進展を遅らせる。ねたみ、疑い、あらさがし、悪意ほど霊性を弱めるものはない。一方、神の教会を構成しているいろいろな性質の人たちの間における調和と一致は、神がみ子をこの世におつかわしになったことを最も確かにあかしするものである。…

未信者たちは、クリスチャンと自称する人たちの信仰が、彼らの生活にきよめの力を及ぼしているかどうかを見守っている。だが、彼らはすぐに品性の欠点や行為の矛盾をみつける。…クリスチャンはみな一つの家族で、みな同じ天父の子供たちであり、同じように祝福された不死の望みを抱いているのである。互いを結び合わせている絆は固く愛情のこもったものである。…「わたしたちは言葉や口先だけで愛するのではなく、行いと真実とをもって互いに愛し合おうではないか」と使徒ヨハネは書いている。（患難から栄光へ下巻 249-254）

12月18日

内外の危機

「愛する者たちよ。すべての霊を信じることはしないで、それらの霊が神から出たものであるかどうか、ためしなさい。多くのにせ預言者が世に出てきているからである。」（ヨハネ第一 4:1）

歳月が流れて、信者の数が増えるにしたがい、ヨハネはますます誠実に、熱心に兄弟たちのために働いた。時代は教会にとって非常に危険なときであった。サタンの欺瞞は至るところにあった。サタンの使者たちは中傷や偽りによって、キリストの教えに反対しようとした。その結果、教会は不和と異端におびやかされていた。…こうして多くの者たちが懐疑と欺瞞の迷路に連れ込まれた。

ヨハネはこうした悪意ある誤りが教会に忍びこんで来るのを見て、悲しみでいっぱいになった。彼は教会が危険にさらされていることを悟って、すぐさまこの急場に果断な処置をとった。ヨハネの手紙は愛の精神を漂わせている。それは、まるで彼が愛の中にペンをどっぷり浸して書いたように思える。しかしヨハネは、神の律法を犯しながら、なお罪のない生活をしていると主張する人々と接触するにあたって、その人たちの恐ろしい欺瞞を、ためらうことなく忠告した。 …

われわれは、キリストのうちにとどまっていると主張しながら、神の律法を犯す生活をしている人々に対して、愛されたヨハネと同じ判断をする権威を認められている。初代の教会の繁栄をおびやかしたような悪が、この終わりの時代にも存在する。ゆえに、こうした点についての使徒ヨハネの教えを、慎重に心にとめていなければならない。…

キリストが身代わりとなられた魂を愛しているかぎり、悪と妥協しないようにしなければならない。われわれは反逆者と手を結んで、これを愛と呼ぶべきではない。神は現代の世界にいる神の民たちに、ヨハネが魂を破壊する過ちに反対して立ったように、正義のために断固として立つよう要求されている。…

彼は自分の知っていること、自分が見たり、聞いたりしたことを話した。…救い主に対する愛が豊かにあふれる心から彼は話したので、だれも彼の言葉をとめることはできなかった。·····

それゆえに、まことのクリスチャンはみな、自分自身の経験を通して、「神がまことであることを、たしかに認め」ることができる（ヨハネ 3:33）。クリスチャンは、キリストのみ力について、見たり聞いたり感じたことを証しすることができるのである。（患難から栄光へ下巻 256-259）

12月19日

心と生活における純潔

「彼についてこの望みをいだいている者は皆、彼がきよくあられるように、自らをきよくする。」（ヨハネ第一 3:3）

ヨハネは聖潔の教師であった。そして教会へ宛てた手紙の中で、クリスチャンの行いについてまちがうことのない原則を書き記した。…クリスチャンは心と生活がきよくなければならないと、ヨハネは教えた。口先だけのむなしい言葉に満足してはならない。神が天において神聖であられるように、堕落した人間はキリストに対する信仰によって、そのいるところできよくなければならない。 …

きよいと自称する者、彼らのすべてを主のものだと断言する者、神のみ約束を受ける権利があると主張する者、そう言いながら神の律法に従うことを拒んでいる者たちがいる。こうした律法の違反者たちは、神の子らに約束されている事を何でも要求するが、これは彼らの側の推量に過ぎない。なぜならヨハネは、神に対する真の愛は十戒のすべてを守ることにあらわされる、と述べているからである。真理の理論を信じ、キリストに信仰の告白…だけでは十分でない。「『彼を知っている』と言いながら、その戒めを守らない者は、偽り者であって、真理はその人のうちにない。…」と、ヨハネは書いた。

ヨハネは、従順によって救いを得るべきだと教えているのではなく、従順が信仰と愛の実であると教えた。…もしわれわれがキリストにおり、神の愛が心に宿っているならば、われわれの感情、思想、行動は神のみこころに一致し、きよめられた心は、神の律法の教えに調和する。

神の戒めに従おうと努めながら、喜びや平安のない人が多い。彼らの経験に喜びや平安が欠けているのは、信仰を働かさないからである。彼らはあたかも、塩の土地や焼けつく荒野を歩いているかのようである。彼らは多くのことを求めることができるのに、ほとんど求めない。神の約束には制限がないのである。このような人たちは、真理に従うことによって与えられるきよめを正しく示していない。主はご自分のむすこ、娘たちのすべてを幸福で、平和にみち、従順なものにさせて下さる。信者は信仰を働かせることによって、これらの祝福を受けるようになる。信仰によって、品性の欠陥がすべて補われるのであり、すべての不潔なものがきよめられ、欠点がなおされ、長所がのばされるのである。（患難から栄光へ下巻 262-267）

12月20日

暗黒のかなたに栄光

「いったい、キリスト・イエスにあって信心深く生きようとする者は、みな、迫害を受ける。」（テモテ第二 3:12）

迫害のもとに受けた使徒ヨハネの経験には、クリスチャンにとってすばらしい力と慰めの教訓がある。神は悪い人々の計画を阻止なさるのではなくて、彼らの策略を、試みや戦いの中にいながら信仰と忠誠を守り通す人々の利益となるように導かれる。…

どんなに暗い時にも神に頼り、どんなにきびしい試練にあい、嵐にもまれても、天父が船のかじを握っておられることを感じることができるのは、信仰の働きである。信仰の目だけが、現在の事柄のかなたをながめ、永遠の富の価値を正しく評価することができる。

イエスはこの世の栄光や富をめざしたり、試練のない生活ができるような希望を、主に従う者たちにお与えになったのではない。それどころか、イエスは彼らに、ご自分に従って克己と非難の道を歩むよう求めておられる。世をあがなうために来られたイエスは、悪の連合軍に反対された。…

キリスト・イエスにあって信心深く生きようとする者たちはみな、このようになるであろう。キリストの霊に満たされている者たちすべてに、迫害と非難が待っている。‥‥

各時代にわたり、サタンは神の民を迫害してきた。彼は神の民を苦しめ、殺害してきたが、神の民は死ぬことで勝利者となった。彼らはサタンよりも偉大な方の力をあかしした。悪人は肉体を苦しめ、殺すかもしれないが、キリストと共に神のうちに隠されているいのちに触れることはできない。悪人は人々を獄屋に監禁することができても、彼らの心を縛ることはできない。

試練と迫害を通して神の栄光－神のご品性－が、その選民の中にあらわされる。…彼らはきびしい戦いを通ってキリストに従い、克己に耐え、苦い失望を経験する。しかし、このようにして彼らは罪の罪深さと苦悩を知り、嫌悪の思いをもって罪を見るようになる。キリストの苦難に共にあずかるとき、彼らは暗黒のかなたに栄光を仰ぎ、「わたしは思う。今のこの時の苦しみは、やがてわたしたちに現されようとする栄光に比べると、言うに足りない」と、言うことができるのである（ローマ 8:18）。（患難から栄光へ下巻 278-281）

12月21日

12使徒の最後の者

「わたしのために人々があなたがたをののしり、また迫害し、あなたがたに対し偽って様々の悪口を言う時には、あなたがたは、さいわいである。」（マタイ 5:11）

ヨハネは非常に長生きした。彼はエルサレムの滅亡と、堂々とした神殿の荒廃を目撃した。救い主と親しくつながっていた弟子たちの最後の生き残りとしての彼の言葉には、イエスがメシヤであり、世のあがない主であるという事を説くにあたって大きな影響力があった。…

ユダヤ人の役人たちは、キリストのみわざにゆるぎない忠誠をつくしているヨハネに、はげしい憎しみをいだいていた。ヨハネのあかしが人々の耳に鳴り続けているかぎり、クリスチャンに反対する自分たちの努力は何の役にも立たないと、彼らは言った。イエスの奇跡や教えが忘れられるためには、その勇敢な証人の声を黙らせなければならない。

そのためにヨハネは、信仰を試みられるためにローマに呼び出された。その当局者たちの前で、使徒の教理は誤って述べられた。偽りの証人たちは、扇動的な異端を教えているとして彼を告訴した。…

ヨハネは明瞭に、説得力を持って弁明した。…しかし彼のあかしに説得力があればあるほど、反対者たちの憎しみは深まった。ドミティアヌス皇帝は激怒した。彼はキリストの忠実な支持者ヨハネの論法を論駁することも、ヨハネが真理を語るときに伴った力に対抗することもできなかった。それでも彼は、必ずヨハネの声を沈黙させようと決意した。

ヨハネは煮えたぎる油の大がまの中に投げ込まれた。しかし主は、燃えさかる炉の中の3人のヘブル人を守られたように、この忠実なしもべのいのちを守られた。こうして欺瞞者ナザレのイエス・キリストを信じる者たちはみな滅びると、言葉が語られた時、ヨハネは、わたしの主は、サタンとその天使たちが主を辱め苦しめようと計るすべてのことを、辛抱強く受けられるのであると、言明した。キリストは世を救うために命をささげられた。わたしは主のみわざのために苦しむことを許され、光栄である。わたしは弱く、罪深い者であるが、キリストはきよく、罪のない、純潔な方であった。主は罪を犯さず、語られることばにも悪意は見られなかった。

これらの言葉には影響力があった。ヨハネは、彼を大釜に投げ込んだ同じ男たちによって、大釜から出された。（患難から栄光へ下巻 272，273）

12月22日

神だけと共に

「あなたの受けようとする苦しみを恐れてはならない。見よ、悪魔が、あなたがたのうちのある者をためすために、獄に入れようとしている。…そうすれば、いのちの冠を与えよう。」(黙示録 2:10)

皇帝の命令によりヨハネは「神の言とイエスのあかしとのゆえに」有罪を宣告されて、パトモス島に追放された (黙示録 1:9)。ここではもはやヨハネの影響力は及ばず、やがて彼は困難と失望のうちに死ぬにちがいないと、彼の敵たちは思った。

パトモスはエーゲ海にある不毛の、岩の多い島であり、ローマの政府により犯罪者の流刑の場所として選ばれていた。しかし神のしもべにとって、この陰気な住居は天にいたる道となった。ここで、生活の忙しい場面から、また、これまでの活発な働きから遮断されて、ヨハネは神とキリストと天使たちとの交わりを持ち、彼らから今後の教会のための指示を受けたのである。…

パトモス島の崖や岩間で、ヨハネは創造主と交わった。彼は過去の生活を振り返って、これまで受けてきた祝福を思い、平和な気持ちでいっぱいになった。…

ヨハネは彼の孤立した家の中で、これまで以上に深く、自然の書や霊感のページに記されている神の力の啓示を学ぶことができた。…以前には彼の目に飛び込んできたものは、森でおおわれた山々や緑の谷、実り豊かな平原であった。そして、自然の美しさの中に、創造主の知恵と巧みをたどることが彼の喜びであった。今、ヨハネは、多くの人たちにとっては陰気でおもしろくもなさそうな風景に取り巻かれていたが、彼にとって、それはまた別であった。彼の周囲のものは荒れ果てて、味気ないものであったかもしれないが、彼の頭上にひろがる青い大空は、彼の愛したエルサレムの上の大空のように輝かしく美しかった。荒れて、ごつごつした岩に、海原の神秘に、大空の輝きに、彼は大切な教訓を読みとった。これらすべてに神の力と栄光を語るメッセージがあった。……

岩は彼に、彼の力の岩であられるキリストを思い起こさせた。この岩かげに彼は恐れなく身を隠すことができた。岩の多いパトモス島に追放された使徒から、神を求める最も熱烈な魂の切望と、最も熱情的な祈りがささげられた。(患難から栄光へ下巻 273-276)

12月23日

あなたは武具をつけていなさい

「わたしはあなたがたの年老いるまで変らず、白髪となるまで、あなたがたを持ち運ぶ。わたしは造ったゆえ、必ず負い、持ち運び、かつ救う。」（イザヤ 46:4）

ヨハネの経歴は、神が年老いた働き人をお用いになる方法の顕著な実例を示すものである。ヨハネがパトモス島に追放された時、多くの人々は彼の奉仕が終わった、折れた古い葦は今にも倒れるであろうと思っていた。しかし主は彼をまだ用いることが適当であるとご覧になった。以前の働き場から追放されたが、彼は真理のあかしを立てることをやめなかった。パトモスにいてさえも彼は友人や改心者をつくった。彼のメッセージは喜びのメッセージであり、よみがえられた救い主が、天において彼らのためにとりなしをしておられ、ついにはその民を迎えにもどって来られることを宣べ伝えるものであった。…

生涯の力を傾けて神のみわざと取り組んできた人々に対しては、最も心のこもった敬意を表さなければならない。こうした老齢の働き人は、嵐や試練の真っただ中に忠実に立ってきた。彼らは病弱になっているかもしれない。しかし彼らはなお、神のために彼らの本分を全うする才能も資格も持っている。たとえ衰えて、若い者たちが負うことのできる、また、負わなければならないような重い責任を、負うことができなくとも、彼らが与えることのできる勧告は最も価値のあるものである。

彼らは間違いをしたこともあったであろう。しかし、失敗から彼らは、誤りや危険を避けることを学んできた。だからこそ賢明な勧告を与える資格があるのではないだろうか。彼らは試みや試練に耐えてきた。そして彼らの活力の一部は失われたかもしれないが、主は彼らを除かれない。主は彼らに特別の恵みと知恵を与えておられる。…

主は若い働き人たちに、こうした信仰の深い人々と交わることによって、知恵と力と円熟とを身につけるよう望んでおられる。…

キリストのみわざに一生をささげてきた人たちが、地上での奉仕を終える時期に近づくと、聖霊による感銘を受けて、これまで神のみわざに携わっていた時の経験を詳しく話すようになる。神がその民を導かれたすばらしい配慮や、試練から彼らを救い出された神の大きな恵みの記録は、新しく信仰に導かれてきた者たちに繰り返し語られなければならない。神はこの年老いた経験豊かな働き人たちが、彼らの持ち場に立って、人々を悪の大波に押し流されないよう救うために彼らの分をなすようにと望んでおられる。神は、武具を脱ぐよう彼らに命じるまでは、武具をつけているようにと望んでおられる。（患難から栄光へ下巻 276，278）

12月24日

主は今に至るまでわたしたちを助けられた

「主に感謝し、そのみ名を呼び、そのみわざをもろもろの民のなかに知らせよ。主にむかって歌え、主をほめうたえ、そのすべてのくすしきみわざを語れ。」（詩篇105:1，2）

ご自分の民に対して神が扱われた方法はしばしば繰り返して話されるべきである。古代イスラエルに対する主の扱い方において、主はどれほどたびたび道しるべを設定されたことであろうか。民が過去の歴史を忘れてしまわないようにと、主はこれらの出来事を歌にするようにとモーセに命じられた。そうすれば両親が子供たちに教えることができるからであった。彼らは思い出を集め、目に見えるようにすべきであった。彼らが守られるには特別の痛みが必要であったが、それは子供たちがこれらのことに関して尋ねる時、物語全体を繰り返すことができるためであった。このようなみ摂理による扱いや著しい慈しみ、また神の心づかいの内にある憐れみとみ民の救出が心に留められた。わたしたちは「光に照らされたのち、苦しい大きな戦いによく耐えた初めのころのことを思い出」すよう勧められている（ヘブル10:32）。なぜならこの世代のご自分の民のために、主は不思議な御業をされる神として働かれたからであった。……わたしたちはたびたび神の慈しみを数え上げ、その驚くべき御業のゆえに神をほめたたえる必要がある。（教会への証6巻364，365）

わたしたちの確信を投げすてないで、ますますかたい保証を握らねばなりません。「主は今に至るまでわれわれを助けられた」（サムエル上7:12）とありますが、神は終わりまでわたしたちを助けられるのである。主がわたしたちを慰め、滅ぼす者の手より私たちを救われた際の記念の塔をながめよう。神は、涙をぬぐい、痛みを和らげ、心労を除き、恐怖を取り去り、必要を満たし、祝福をさずけられたのであるが、こうした神のあわれみの数々を常に心にとめて自らを励まし、わたしたちの前途に横たわる残りの旅路を進まねばならない。

わたしたちは、来たるべき争闘においては新しい困難が起こることを避けることがでないが、将来を見るとともに過去をもふり返って「主は今に至るまでわれわれを助けられた」「あなたの力はあなたの年と共に続くであろう」（申命記33：25）と言うことができる。神は、わたしたちの力に耐えられない試練にあわせることはない。どんなことが起こっても、試練に相当する力が与えられることを信じて、与えられるままにわたしたちの仕事を始めよう。（キリストへの道175，176）

12月25日

神に栄光あれ

「日のいずるところから日の入るところまで、主のみ名はほめたたえられる。」（詩篇 113:3）

聖書には、人間を賞賛する言葉がほとんどない。この世に生存した最も善良な人々の美徳でさえ、聖書にあまり書かれていないのである。この沈黙は無意味ではない。そこに教訓が隠されている。人間が持っている美点は皆、神の賜物である。彼らの善行は、キリストを通して与えられた神の恵みによって行われた。彼らは、すべてを神に負うているのであるから、彼らがどんな人間で、どんな行為をしようとその誉れは神にだけ帰すべきである。彼らは、ただ、み手の中の器に過ぎないのである。そればかりではない。聖書の歴史のすべての教訓が教えているように、人間を賞賛し、高めることは危険である。なぜなら、人間が神に全く依存していることを見失い、自分自身の力にたよるようになると、彼は必ず堕落するからである。人間は、人間以上に強い敵と戦っている。…われわれは、自分の力で戦い続けることはできない。そして、心を神からそらし、自己高揚と自己依存に陥れるものは何であっても、必ずわれわれを敗北させるものである。聖書は、人間の能力にたよらず神の力にたよることを奨励するのをその主題としている。（人類のあけぼの下巻 414）

真に改心した魂は上からの光に照らされる。……その人の動機や行動は誤解されたり、偽り伝えられるかもしれない。しかし彼にはもっと決定されるべき重大な関心ごとがあるので、そのようなことは気にしない。……彼は誇示に憧れないし、人の称賛を切望しない。彼の希望は天にあるので、目をイエスに留めてまっすぐに進む。彼はそれが正しいことだから正しいことを行う。（教会への証 5 巻 569）

キリストに従う者は、その善行によってほまれを自己に帰すのではなく、彼らに善行を行う恵みと力を与えたお方に帰さなければならない。よきわざがなし遂げられるのはすべて聖霊によるのであって、聖霊はそれを受ける人間の栄えのためではなくて、その与え主なる神に栄えを帰するために授けられる。キリストの光が魂の中で輝く時、くちびるは神への賛美と感謝に満たされる。あなたは自分の祈り、自分の義務を果たしたこと、自分の博愛、自分の自己犠牲などは 考えもしなければ、話題にもしない。イエスがますます大きくなり、自己は隠され、キリストがすべてのすべてとなるのである。（祝福の山 99）

12月26日

気高い模範

「それでもなお正しい者はその道を堅く保ち、潔い手をもつ者はますます力を得る。」（ヨブ 17:9）

聖書にしるされている歴史の中には真の教育の結果について、多くの実例が示されている。そこには、神の導きによって品性を陶冶した人々の多くの尊い例が示されている。彼らは人類同胞の祝福となるような一生を送り、神の代表者として世に立った人々である。そうした人々の中に、最も偉大な政治家であるヨセフとダニエル、最も懸命な立法官であるモーセ、最も忠実な改革者であるエリシャ、また「この人の語るように語った者はこれまでにありませんでした」と人々が言ったイエスを除けば世界でもっともすぐれた教師であるパウロといったような人物がある。ヨセフとダニエルは、ちょうど子供から大人になる年頃に家庭を離れて囚われの身として異教の国へ連れていかれた。ことにヨセフは大きな運命の変化を伴った数々の試練に会ったのであった。彼は少年時代を父のひざ元に愛されて育ち、ポテパルの家にあっては奴隷となり、やがて主人の信認を得てその友となり、学問と観察と人々との接触によって教養を身につけた。家宰となり、無実の罪を受けて弁明の自由も赦免の望みもなく国家の罪びととしてパロの牢獄につながれたが、非常な危機に際して国民の指導者として召し出されたのであった。そうした中にあって彼に誠実な心を持ち続けさせたのは何であったろうか。……

神への忠誠、目に見えない神への信仰が、ヨセフの錨であった。ここに彼の能力が隠されていた。……

ヨセフとダニエルは、知恵と公平を表し、日々の純潔で情け深い生活を送り、民のために、しかも偶像教徒であったその民の利益のために、献身的な努力をささげることによって、幼い頃にしつけられた原則に背かず、自分の代表としている神に忠実であることを立証した。……

この気高いヘブルの青年たちはなんという高貴な一生の働きを成し遂げたことであろう。……

神は、これらの人物を通して表された同じ偉大な真理を、今日の青年男女を通して表そうと望んでおられるのである。ヨセフとダニエルの歴史は、神に献身し、全身全霊を持って神の御目的を成就しようと努力する人々に対して、神がどのようなことをなさるかということの生きた例である。（教育 47-54）

すべてをキリストによって

「わたしが恐れるときは、あなたに寄り頼みます。」（詩篇 56:3）

臆病な子供は恐怖心のために人生を重荷に感じるが、それは神のみ前にあるという意識によってのみ払い除けることができる。「主の使いは主を恐れる者の周りに陣を引いて彼らを助けられる」というみ約束を彼の記憶に刻み込むがよい（詩篇 34:7）。山の都市でエリシャと武装した敵の軍勢との間を天使の大軍勢がとりまいていたという不思議な話を彼に読ませるがよい。死刑を宣告されて獄中にあったペテロに神の天使が現れ、武装した番兵と重い戸とかんぬきのかかった鉄の大門を通り過ぎて、この神の僕を安全に連れ出したことを読ませるがよい。嵐に翻弄された兵士と船員たちが働きと見張りと幾日もの断食に疲れ果てたときに、審問と処刑のために道中にあった囚人パウロが、彼らにむかって、「元気を出しなさい。船が失われるだけであなたがたの中で生命を失う者は一人もいないであろう。……わたしがつかえ、また拝んでいる神からの御使が、わたしのそばに立っていて言った『パウロよ恐れるな、あなたは必ずカイザルの前に立たなければならない。確かに神はあなたと同船の者を、ことごとくあなたに賜っている』」と勇気と希望に満ちた堂々たる言葉を語った時のあの海上の光景について読むがよい。この約束を信じてパウロは「確かに髪の毛一筋でも、あなたがたの頭から失われることはないであろう」と仲間に保証し、そして実際その通りになったのである。船の中に、神がその人を通して働くことのできる人が一人いたために、船全体の異教の兵士と船員たちの生命が救われたのである。「こうして全部の者が上陸して救われたのであった」と記録されている。（使徒行伝 27:22-24，34，44）。

こうしたことは、ただわれわれが読んで不思議に思うために書かれたのではなくて、昔の神の僕たちのために働いた同じ信仰が我々の中にも働くように書かれたのである。今日も神は神の能力の器となる信仰心のある所には、むかし働かれた時と同じように目覚ましく働かれるのである。

自信のない者は独立独行の精神に欠けているために苦労や責任を避けたがるが、このような人には神に信頼することを教えなければならない。そのままでは世の中の役に立たない人間、おそらくは無力な厄介な者に過ぎない多くの人間がこのようにして使徒パウロと同じように「わたしを強くしてくださるかたによって何事でもすることができる」ということができる（ピリピ 4:13）。（教育 302，303）

12月28日

絶望する必要はない

「正しい者は七たび倒れても、また起きあがる、しかし、悪しき者は災によって滅びる。」（箴言 24:16）

自らの働きに誠実な霊感の筆は、ノア、ロト、モーセ、アブラハム、ダビデ、ソロモン、そしてエリヤの力強い精神ですらその恐ろしい試練の時に誘惑にくず折れてしまった。その罪についてわたしたちに述べている。ヨナの不従順とイスラエルの偶像礼拝は忠実に記録された。ペテロがキリストを否定したこと、パウロとバルナバのするどい論争、預言者や使徒たちの失敗や弱点はみな暴露されている。……信者の生涯が彼らの過ちや愚行をもろともにわたしたちの前に置かれているのは、彼らに続くすべての世代に対する教訓としてである。もし彼らが欠点のない者であったなら、人間以上の者であったであろうし、わたしたちの罪深い性質はそのような気高さに到達することについていつまでも絶望しているであろう。しかし彼らがもがき、失敗しても再び気を取り直して、神の恵みを通して打ち勝つのを見ることにより、わたしたちは勇気づけられ、自分の堕落した性質が自分の歩む道に置いていた障害物を押しのける。

神は罪を罰することにいつも忠実であられた。このお方は罪を犯すことに対して警告し、民の罪を弾劾し、彼らに判決を下すために預言者を送られた。……

わたしたちは聖書がわたしたちに与えているまさにその教訓を必要としている。罪を明らかにするとともにそれに続く報いも記録されているからである。罪を犯したことに対する悲しみと悔悟、また罪に悩む魂を癒す場が、現在神の許しを与えるあわれみが必要であるように、その時にも人に必要であったことを過去からわたしたちに伝えているのである。……

聖書の中の歴史は弱々しい心に神の憐みに対する希望を持たせる。他の人々がわたしたち自身のように失望してもがき、自分がしたように誘惑におちいりながらも、自分の地歩を固め、神に祝福されるのを見る時、わたしたちは絶望する必要はないのである。霊感の言葉は過ちを犯す魂を慰め励ます。父祖も使徒たちも人間の弱さを持っていたけれども、信仰によってよい記録を手に入れ、主のみ力によって自分の戦いを戦って見事に打ち勝ったのである。このようにわたしたちも、贖いの犠牲の徳に信頼して、イエスのみ名による勝利者となれるように。（教会への証 4 巻 12-15）

12月29日

神はご自分の者を覚えておられる

「それゆえに、天とその中に住む者たちよ、大いに喜べ。しかし、地と海よ、おまえたちはわざわいである。悪魔が、自分の時が短いのを知り、激しい怒りをもって、おまえたちのところに下ってきたからである。」（黙示録 12:12）

各時代にわたって、神に任命されたあかしびとは真理のために恥辱や迫害に身をさらしてきた。ヨセフは徳と高潔を守りつづけたためにそしられ、……神に選ばれた使命者ダビデは敵から猛獣のように追われた。……ステパノはキリストと十字架につけられた主のことを宣べ伝えたために、石で打たれた。パウロは異邦人に対する神の忠実な使命者であったために、むちで打たれ、石で打たれ、ついに死刑にされた。ヨハネは「神の言とイエスのあかしとのゆえに」、パトモス島に流された。

こうした人間の不動の信念をあらわす模範は、神の約束－神の内住と支えて下さる恵み―の確かなことをあかししている。（患難から栄光へ下巻 279）

われわれの前にある苦難と悩みの時はわれわれに疲労と遅延と飢えに耐える信仰を要求する。激しく試みられても落胆しない信仰が必要である。（各時代の大争闘下巻 395）

あらゆる国のあらゆる階級の人々が、身分の高い者も低い者も、富んだ者も貧しい者も、黒人も白人も、大勢の者が最も不当で残酷なとらわれの身に突き落とされる。神に愛されている者たちが、疲れきった日々を送り、鎖につながれ、牢獄の格子の中に閉じ込められ、死刑の宣告を受ける。ある者は暗くいまわしい土牢の中で、餓死するままに放置されているように見える。彼らのうめきを聞く人間の耳はなく、彼らを助けようとする人間の手はない。（同上 401）

この試みの時に、主はご自分の民をお忘れになるだろうか。主は、洪水前の世界に刑罰がくだった時、忠実なノアをお忘れになっただろうか。平地の町を焼き尽くすために火が天からくだった時、ロトをお忘れになっただろうか。エジプトで偶像礼拝者たちに囲まれていたヨセフをお忘れになっただろうか。イゼベルがエリヤをバアルの預言者と同じ運命にすると誓って彼を脅かした時、主はエリヤをお忘れになっただろうか。……

敵が彼らを牢獄に投げ入れても、土牢は彼らの魂とキリストとの交わりを断ち切ることはできない。彼らのあらゆる弱さを見、あらゆる試みを知っておられるお方は、地上のすべての権力に勝っておられる。そして天使は寂しい独房に彼らを訪れ、天よりの光と平安を伝える。（同上 401, 402）

12月30日

まずすべきこと

「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。」（マタイ 6:33）

この約束はいつまでも存続する。神の恩寵が与えられる条件に応じない限り、わたしたちはこのお方の恩寵を楽しむことはできない。応じる時に、世が与えることも取り去ることもできない平安と満足そして知恵がわたしたちにもたらされるのである。……へりくだった思いと感謝に満ちた心は、些細な試練や真の困難をわたしたちに超越させる。わたしたちが主の奉仕に熱心さや活気が薄れ、油断をするようになればなるほど、思いは自己に傾き、些細なことをさも大きな困難であるかのように拡大してしまう。……

モーセの肩に置かれた神のみ働きという重荷は彼を力溢れる人にした。長年の間エテロの羊を飼っている間に、彼は真のへりくだりを学ぶ経験をした。…イスラエルを救い出すようにとの命令は途方に暮れるものであったが、神を畏れてモーセはその信任を受け入れた。その結果に注目しなさい。彼はその働きを自分の不完全な状態までその働きを引き下ろすのではなく神の力強さのうちに聖なる任務のために自分自身を向上させ清めるために最も熱心な努力をした。

モーセは神が自分のために働いて下さることを待っていたなら、責任ある立場のために準備をすることは決してできなかった。天からの光はそれを必要と感じる者、またその光を隠された宝として探し求める者の所にもたらされる。しかし、もしわたしたちが自らすすんでサタンの力に支配され、不活動の状態に陥るなら、神はご自分の霊感をわたしたちにお送りにはならない。神がわたしたちに与えてこられた力を最大限に用いない限り、わたしたちはいつまでも弱く無能なままである。神がわたしたちにゆだねたいと思っておられる働きを行う備えをしたいのなら、多くの祈りと思いを最高度にまで活発に働かせる必要がある。多くの人は自分たちが占めることのできる立場に決して到達することができない。なぜなら自分自身のために用いることができるようにと神が与えてくださったその力を、神が自分のために用いてくださるのを待っているからである。この世で有益な者にふさわしくなる者はみな精神面においても道徳面においても最も厳しい原則によって訓練されねばならない。そうする時、神は神の力と人間の努力を結びつけることにより彼らを助けてくださる。……

間違った習慣は一回の努力では打ち勝てない。長い厳しい苦闘を通してのみ自己は抑制される。（教会への証 4 巻 610，612）

12月31日

わたしたちのためのご計画

「万軍の主が定められるとき、だれがそれを取り消すことができるのか。その手を伸ばされるとき、だれがそれを引きもどすことができるのか。」（イザヤ 14:27）

歴史における一人一人は自分の分と場所における役割を果たす。なぜなら神ご自身の計画に続くその大いなるみ働きは善のためであっても悪のためであってもその立場を占めるために準備をした人間が進めていくからである。人は正義に敵対すると不義のための道具となる。しかし彼らはこの行動をとるようにと強制されることはない。彼らはカインがそうする必要がなかったように、不義の道具となる必要はないのである。……

あらゆる性格の人々、義なる者も不義なる者も、神のご計画の中でいくつかの立場に立つ。自分が形作った品性をもって、彼らは歴史の成就において自分の役割を演じる。危機において、まさにその瞬間彼らは自分で占めるために準備をしていたその場所に立つ。信者と未信者は自分では理解していない真理を確認するために証人としてそれぞれの立場を埋める。ちょうどアンナスとカヤパ、ピラトとヘロデがしたように、すべての者は神の御目的を成就するために協力する。キリストを死に定めることにより祭司たちは自分自身の目的を果たしていると思っていたが、無意識のうちにまた思わず、知らず神の御目的を成就していたのであった。（ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1900 年 6 月 12 日）

神は自らお造りになった小さい種をながめ、その中に美しい花、灌木、または高くそびえる枝を広げている木が包蔵されているのをご覧になるが、それと同じように各個人のうちに可能性を見られるのである。わたしたちはある一つと目的のためにこの地上にいるのであって神はわたしたちの生涯のために計画を与え、わたしたちが最高の発育を遂げるように望まれている。

神は青年が全身の力を発育させ、あらゆる能力を盛んに働かせるように神は希望されている。この世においてわたしたちが有益な貴重な者をすべて楽しみ、良い人となり良いことを行い、来るべき国のために天の宝を蓄えるように望んでおられる。……青年が、模倣すべき型としてキリストを見上げさせるべきで、その生涯に表されているキリストの聖なる待望を青年が持ち自分が世の中に生きていることによってこの世界をよりよくするという望みを抱かなければならない。青年が召されたのはこの働きをするためである。（ﾐﾆｽﾄﾘｰ・ｵﾌﾞ・ﾋｰﾘﾝｸﾞ 367）

あなたがたは今……自分を造ってくださった神の御目的に添うように、自ら社会と人生に向かい合うことを望んでいる。（青年への使命 23）

研究 11

わたしたちが信仰の一致に到達するまで

注がれたのは、尊い油

イエスが約束し、与えたいと切望しておられた聖霊を、弟子たちが求めて祈るようになったとき、長い間せき止められていたかのような御霊の流れが豊かに彼らの上に注がれました。天でイエスが祭司として神の右に座につかれたときに注いで下さったその尊い油が、どのようなものであったのかを見てみましょう。

尊い油

「見よ、兄弟が和合して共におるのはいかに麗しく楽しいことであろう。それはこうべに注がれた尊い油がひげに流れ、アロンのひげに流れ、その衣のえり（すそ）にまで流れくだるようだ。またヘルモンの露がシオンの山に下るようだ。これは主がかしこに祝福を命じ、とこしえに命を与えられたからである」（詩篇 133:1）。

「また祭壇の上の血および注ぎ油を取って、アロンとその衣服、およびその子たちと、その子たちの衣服とに注がなければならない。彼とその衣服、およびその子らと、その衣服とは聖別されるであろう」（出エジプト記 29:21）。

「あなたはまた最も良い香料を取りなさい。すなわち液体の没薬五百シケル、香ばしい肉桂をその半ば、すなわち二百五十シケル、におい菖蒲二百五十シケル、桂枝五百シケルを聖所のシケルで取り、また、オリブの油一ヒンを取りなさい。あなたはこれを聖なる注ぎ油、すなわち香油を造るわざにしたがい、まぜ合わせて、におい油に造らなければならない。これは聖なる注ぎ油である」（出エジプト 30:23）。

ここで述べられている聖なる注ぎ油とは、聖所で用いられた油を指し、他で用いることは許されていませんでした。

「そしてあなたはイスラエルの人々に言わなければならない、『これはあなたがたの代々にわたる、わたしの聖なる注ぎ油であって、常の人の身にこれを注いで

はならない。またこの割合をもって、これと等しいものを造ってはならない。これは聖なるものであるから、あなたがたにとっても聖なる物でなければならない。すべてこれと等しい物を造る者、あるいはこれを祭司以外の人につける者は、民のうちから断たれるであろう』。」（出エジプト 30:31-33）。

「注ぎ油、聖所のための香ばしい香などを、すべてわたしがあなたに命じたように造らせるであろう」（出エジプト 31:11）。

ただ、主だけが造ることのできる聖なる油は聖所で注がれました。そして、その油が燭台の火を灯したのです。ゼカリヤ 4 章には、この油について、次のようにあります。

「わたしが見ていると、すべて金で造られた燭台が一つあって、その上に油を入れる器があり、また燭台の上に七つのともしび皿があり、そのともしび皿は燭台の上にあって、これにおのおの七本ずつの管があります。また燭台のかたわらに、オリブの木が二本あって、一本は油をいれる器の右にあり、一本はその左にあります。」「万軍の主は仰せられる、これは…わたしの霊によるのである。」「燭台の左右にある、この二本のオリブの木はなんですか。」「この二本の金の管によって、油をそれから注ぎ出すオリブの二枝はなんですか。」「これらはふたりの油そそがれた者で、全地の主のかたわらに立つ者です。」（ゼカリヤ 4:2-14）。

天の燭台にオリブの木から注がれた油には、没薬や桂枝等が調合されました。それはただ主だけが調合することのできる香油でした。なぜなら、その油に調合された没薬は、キリストの苦難を表していたからです。ニコデモの没薬やマリヤの香油、博士の没薬が、この油を象徴していました。

そして、この没薬の入った油がアロンに注がれ、すそまで、すなわち最後まで流れ下ったのです。

「キリストは天の門の中に入って行かれて、天使たちのさんびのうちに王座につかれた。この儀式が終わるとすぐ、聖霊は豊かな流れとなって弟子たちの上にくだり、キリストは永遠の昔から父と共に持っておられた栄光をお受けになった。ペンテコステの聖霊降下は、あがない主の就任式が完了したことを知らせる天からの通報であった」（患難から栄光へ上巻 34）。

「それはこうべに注がれた尊い油がひげに流れ、アロンのひげに流れ、その衣のえりにまで流れくだるようだ。またヘルモンの露が（祈る弟子たちがいた）シオンの山に下るようだ。これは主がかしこに祝福を命じ、とこしえに命を与えられたからである」（詩篇 133:2,3）。

主が昇天されてからの 10 日間は、弟子たちにとって告白の日々でした。マタイ 9:38 で言われた「だから、収穫の主に願って、その収穫のために働き人を送

り出すようにしてもらいなさい」との意味を悟った弟子たちは、ひたすら祈っていました。天ではイエスが、地上では弟子たちが祈り、その祈りに答えて、尊い油がシオンの山に流れ下ったのです。これが、ペンテコステでした。その油には、イエスの苦難がまじっていました。天から注がれたその香油がアロンのすそを流れ下り、弟子たちの上に注がれたとき、伝えることは決まっていました。その働きの初めに注がれたのが前の雨であり、働きの最後に注がれるのが後の雨です。彼らは、自分たちが一つになるために払われた代価を理解したとき、一つになりました。尊い油、すなわち油に調合された没薬の代価を理解する人たちが、その油を注がれる人たちなのです。

御父自らその代価を支払われた御子を高く引き上げられ、ご自分の右に座すようお命じになったとあります。

「キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。それゆえに、神は彼を高く引き上げ、すべての名にまさる名を彼に賜わった。…」（ピリピ 2:6-11）。

「主はこう言われる、『天はわが位、地はわが足台である』。」（イザヤ 66:1）。

「ところがキリストの昇天後、キリストが仲保者としての職につかれたことが、聖霊の降下によって示された」（キリストの実物教訓 96）。

世の始めからノアの洪水に至るまで、植物を生長させたのは露でしたが、その後、雨が降るようにお命じになったのは主でした。

「しかし、神ご自身が、雨が降るようにお命じにならなければならなかった」（牧師への証 509）。神はこの雨が、すなわち、とこしえの命が降るようにお命じになったのでした。命をかけた弟子たちはこれを知っていました。そして、「神は彼を高く引き上げ、すべての名にまさる名を彼に賜わった。それは、イエスの御名によって、天上のもの、地上のもの、地下のものなど、あらゆるものがひざをかがめ、また、あらゆる舌が、『イエス・キリストは主である』と告白して、栄光を父なる神に帰するためである」（ピリピ 2:9-11）。

「弟子たちはキリストのみ名によって、働きを進めて行かなければならない」（患難から栄光へ上巻 22）。

「あなたのにおい油はかんばしく、あなたの名は注がれたにおい油（尊い油）のようです。それゆえ、おとめたち（花婿を迎える準備をしている者）はあなたを愛するのです」（雅歌 1:3）。

このみ名についての約束を聞いたのも弟子たちでした。

「彼らの言葉や行動はみ名にしっかり結びつけられていて、生き生きした力を持ち、それによって罪人たちが救われるのでなければならない。彼らの信仰は、あわれみと力の源であられるかたに集中する。そのみ名によって彼らはみ父に嘆願し、答えをいただくのであった。弟子たちは、父、み子、聖霊の名によってバプテスマを施さなければならない。キリストのみ名は彼らの合い言葉、彼らを区別するバッジ、一致のきずな、彼らの行動方針を支持する権威、成功の源となるはずであった。キリストの名が書かれていないものは、神の国では認められるはずはないのである」(患難から栄光へ上巻 22)。

ヨハネ 14 章から 16 章では、イエスが弟子たちに、わたしの名によってと 7 回繰り返しておられます。そして、そのみ名によって与えると約束されたとおりに求めた弟子たちが、その後どのように働いたか使徒行伝を読みますと、まさに聖霊行伝とも言えるほど、彼らはそのみ名によって送られた御霊によって語っていたことがわかります。最初の 1 章から最後の 28 章まで、語られたのは聖霊でした。「ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」(使徒行伝 1:8)。「互に意見が合わなくて、みんなの者が帰ろうとしていた時、パウロはひとこと述べて言った、「聖霊はよくも預言者イザヤによって、あなたがたの先祖に語ったものである」(使徒行伝 28:25)。

神はこの「聖霊の一致」を保つようにと言われます。

そのみ名については、使徒行伝の中で 29 回述べられています。

「キリストは、わたしの名によって出て行き、信じる者をすべて教会に集めよと弟子たちに言われたとき、単純さを保つことの必要を彼らに明らかにお示しになった。見栄や見せびらかしが少なければ、それだけ彼らの感化は大きいのである。弟子たちはキリストがお語りになったような単純さで語らなければならなかった。彼らはキリストから教えられた教訓を、聞く者たちの心にしっかり刻みつけなければならなかった」(患難から栄光へ上巻 23)

そして、キリストのみ名によって出て行く人々に神の国における単純さを教えて下さいました。単純であれば単純であるほど、単純に語ることができます。単純な食事、単純な住まい、単純な生活が、キリストがお語りになったような単純さで語らせ、そのように繰り返された教訓は、心にしっかりと刻みつけられます。そして、繰り返すことによって、習慣が身につきます。単純に語られた真理の力がどのように表されたか、その実例を見てみましょう。

「彼らはその書、すなわち神の律法をめいりょうに読み、その意味を解き明かしてその読むところを悟らせた。…すべての民が律法の言葉を聞いて泣いた」(ネ

ヘミヤ 8:8, 9)

意味を説き明かしたとあるのは、判断できるように理解させた (give the sense) という意味です。そして、意味が理解できるように単純に語られたみ言葉を悟らせるのは、聖霊の働きです。イエスのみ名によって、それはすなわち、この聖油によってということでした。「あなたの名は注がれたにおい油 (尊い油) のようです」(雅歌 1:3)。

では、キリストのみ名によって求めた弟子たちが聖油を受けたときの結果はどうだったでしょうか。

「どのクリスチャンもみな、お互いのうちに神の愛と慈善心があらわれているのを見た。ただ一つの関心が支配し、一つの対象 (一つの目的) を求める熱意が他のすべてをのみこんだ。信徒の望みはキリストのご品性に似たものとなることであり、神の国を発展させるために働くことであった」(患難から栄光へ上巻 44)。

「すべてのクリスチャンは、お互いの中に、神のあわれみと愛のみかたちを認めた。皆は一つの事を考え、一つの目的に徹し、すべての人の思いも一つになった。信者の唯一の願いは 、キリストに似た品性をあらわし、キリストの王国の拡張のために働くことであった。『信じた者の群れは 、心を一つにし思いを一つにして、‥‥ 使徒たちは主イエスの復活について、非常に力強くあかしをした。 そして大きなめぐみが、彼ら一同に注がれた』(使徒行伝 4:32, 33)。『そして主は、救われる者を日々仲間に加えて下さったのである』(使徒行伝 2:47)。キリストの霊が全会衆を活気づけていた。それは彼らが高価な真珠を発見したからであった」(キリストの実物教訓 98)。

そして、この歴史は、終わりの時代のさらに大きな約束の保証でした。

「このような光景は、もう一度大きな力をもって再現される。ペンテコステの日の聖霊の降下は、はじめの雨であった。しかし、後の雨は、いっそう豊かに降りそそぐことであろう。聖霊は、わたしたちが聖霊を求めて、受けることを待っておられる。聖霊の力によって、キリストの完全なみかたちが、もう一度、あらわれなければならない」(キリストの実物教訓 98)。

キリストはこれを与えようと待っておられます。聖霊も求められるのを待っておられます。わたしたちはどうでしょうか?

(48 ページの続き)

彼らは言った、『ナザレのイエスのことです。あのかたは、神とすべての民衆との前で、わざにも言葉にも力ある預言者でした』」(ルカ 24:16 − 19)。

それから彼らは何が起こったかを話し、そしてその同じ朝早く墓にいた女たちによってなされた報告を繰り返しました。そこでこのお方は言われました。

「『ああ、愚かで心のにぶいため、預言者たちが説いたすべての事を信じられない者たちよ。キリストは必ず、これらの苦難を受けて、その栄光に入るはずではなかったのか』」。

「こう言って、モーセやすべての預言者からはじめて、聖書全体にわたり、ご自身についてしるしてある事どもを、説きあかされた」。(同上 25 − 27)

弟子たちは驚きと喜びから沈黙していました。彼らは見知らぬ人に誰であるかを尋ねようとはしませんでした。このお方が彼らにキリストの使命について説明されると、彼らは熱心に耳を傾けました。

救い主が最初から弟子たちにご自身を知らせていたら、彼らはそれに満足してしまったでしょう。彼らの喜びは満ちて、彼らはこれ以上何も望まなかったでしょう。しかし彼らはすべての旧約の型と預言によってどのようにこのお方の使命が予告されていたかを理解する必要がありました。これらの上に彼らの信仰が築かれなければなりませんでした。キリストは彼らを悟らせるのに奇跡を行われず、聖書を説明することがその最初の働きでした。彼らはキリストの死を彼らのすべての望みの消滅とみなしていました。ところがこのお方は、ご自分の死こそ、彼らの信仰の最も強力な証拠であることを預言の書からお示しになりました。

この弟子たちを教えるにあたって、このお方はご自分の使命の証拠として旧約聖書の重要性を示されました。クリスチャンと称する人々の多くは、旧約聖書はもう役にたたないと主張して、今では旧約聖書を捨てています。しかしキリストはそういうことを教えてはおられません。キリストは旧約聖書を非常に尊重されて、ある時こういわれたことがあります。「もし彼らがモーセと預言者とに耳を傾けないなら、死人の中からよみがえってくる者があっても、彼らはその勧めを聞き入れはしないであろう」(ルカ 16:31)。

これらはキリストの証人なのです。

里芋の和風グラタン

■材料

里芋	8 個
小松菜	1 束
しめじ	半パック
長ネギ	1／2 本

【ソース】

小麦粉	大さじ 2
サラダオイル	大さじ 2
豆乳 3 カップ	
ココナツミルク	1 カップ
みそ 小さじ 1	
すりごま	大さじ 1
顆粒昆布だし	小さじ 1
しょう油	小さじ 1

■作り方

1. 里芋をゆでます。
2. 野菜を食べやすい大きさに切って、しめじ、長ネギ、小松菜の順番で炒めます。
3. 野菜に火が通ったら、小麦粉をふりかけて、サラダオイルを入れて炒めます。
4. ゆだった里芋とココナッツミルクを入れ、ソースを少しずつのばしながら、豆乳を入れていきます。
5. 残りの調味料を入れます。
6. とろりとしたソースになったら、耐熱皿に入れて、オーブンで焼きます。

味噌と豆乳の和風グラタンです。

教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校：9:30-10:45（公開放送）

礼拝説教：11:00-12:00（公開放送）

午後の聖書研究：14:00-15:00

【公開放送】http://www.4angels.jp

聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理

お申込先：〒 350-1391　埼玉県狭山郵便局私書箱 13 号「福音の宝」係

是非お申し込み下さい。

書籍

【永遠の真理】聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。

【安息日聖書教科】は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。

イエスの物語

第57話

証人（I）

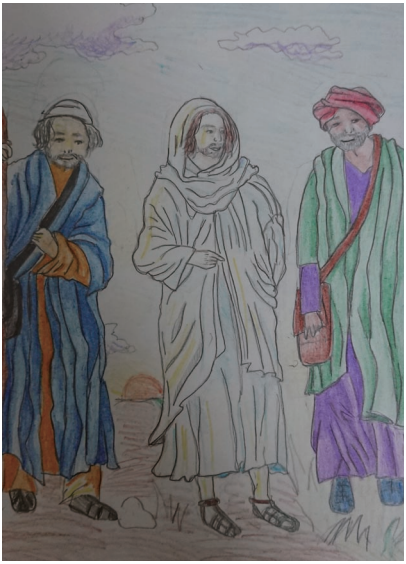
主が復活された日の午後遅く、二人の弟子たちが、エルサレムから８マイルはなれたエマオという小さな町へ向かっていました。

彼らは最近起こった、特に天使たちを見、よみがえられたイエスさまに会った女たちの報告に関する出来事に当惑していました。

彼らは今、彼らにとってとても暗かったこれらの事柄に関して、何らかの光が得られることを望み、瞑想と祈りのために家に帰る途中でした。

彼らが旅をしていると、見知らぬ人がやってきて彼らと一緒になりました。しかし彼らは自分たちの会話で忙しく、彼の存在にほとんど気が付きませんでした。

これらのたくましい男たちが、悲しみを負って泣きながら旅をしていました。キリストのあわれみある愛の心はこのお方が慰めることのできる悲しみをご覧になりました。



見知らぬ人になりすまして、このお方は彼らと話し始められました。「しかし、彼らの目がさえぎられて、イエスを認めることができなかった。イエスは彼らに言われた、『歩きながら互に語り合っているその話は、なんのことなのか』。彼らは悲しそうな顔をして立ちどまった。そのひとりのクレオパという者が、答えて言った、『あなたはエルサレムに泊まっていながら、あなただけが、この都でこのごろ起ったことをご存じないのですか』。『それは、どんなことか』と言われると、

（45 ページに続く）